



鳥取県教育センターだより

Tottori Prefectural Education Center News

〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目201 【TEL】0857-28-2321（代表）【FAX】0857-28-8513

【URL】<http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/> 【e-mail】kyoikucenter@pref.tottori.lg.jp

若手教員の育成にむけて ～H31「とっとり未来教師セミナー」開講～

10月13日（土）県教育センターにて「とっとり未来教師セミナー」を開講しました。本セミナーは、鳥取県で教員をめざすという志をもった講師・学生等が、自主的・継続的な研修をとおして、教員に求められる資質や基礎的な指導力を養い、教職に対する情熱と使命感を高めることを目的として開催しています。本年度で3回目の開催となり、10月から3月まで、全4回の研修を予定しています。

第1回目は、まず、鳥取県教育センター小林所長から受講者一人ひとりに対して、「子どもたち一人ひとりの心に灯をともし教師として成長してもらいたい」という熱いバトンが手渡されました。また、元鳥取県教育委員会小中学校課長の石田明広氏からは、「コミュニケーション能力」「自己研鑽力」「自己責任力」等、“社会人としての教師”にとって大切な力が示され、受講者が自覚を深める機会となりました。

後半に実施した演習では、児童生徒や同僚、保護者や地域の方々への接し方について、具体的場面をとおして考えました。研修全体を通じて“教師としての自分はどうかあるべきか”ということを受講者が自身に問い続けながら、今後に向けての決意を新たにす頼もしい姿を見ることができました。次回のセミナーでも、現在の自分と向き合いながら、さらに学びを深めていってほしいと思います。



自分を振り返ることで、自分を客観的に
見ることができる・・・。

【研修情報】

2年目研修より

「主体的・対話的で深い学び」をめざして
～教員自身が“わくわくする”授業づくりを！～

2年目研修では、「学習指導」を中心として研修を行っています。小学校・義務教育学校における第2回目の研修では、新学習指導要領がめざす「主体的・対話的で深い学び」を体感・実感することをとおした学習指導力の向上をめざし、鳥取県立博物館との連携による「コレクション宅配便」及び、学級経営と図画工作の元エキスパート教員による「先輩に学ぶ」等の授業づくりに関する講座を実施しました。この連携は、県立美術館の平成36年度開館予定に向けて、子どもたちの想像力・創造性を育むために「美術を通じた学び」を美術館と学校教育とが共に育んでいくことの大切さ、その意味や価値を広げていきたい、という願いも込められたものです。博物館から持ち込まれた本物の作品を鑑賞し、豊かな授業実践にふれたこの出会いは、感性や想像力の働きを教員自身が体感・実感すると同時に、日々の子どもたち一人ひとりの学びを指導者がどう見取るか、また指導の工夫・手立てをどう仕組むかを改めて考える機会となりました。心の動く、明日の授業づくりにつながる研修となりました。



「どの題材で指導するか」ではなく、「〇〇の力をこの題材でつ
ける」ために、何ができるか、
どう教えるかを考えていきたい。

受講者
振り返り
より

自分の心が動かなければ、子どもたちの心は動かない。子どもの
可能性を広げるかどうか…教員の責任は重大だ。よい準備は
怠れないと思った。

教える側の楽しさやわくわくが伝わる。子どもの興味・関心の把握や教材研究をしっかり
すること、自分でもやってみることが大切だと実感した。

シリーズ

ICT活用に向けて③

対話を深めるために「はじめよう、授業におけるICT活用」研修より

鳥根大学教職大学院の千代西尾教授から、授業で深まりのある対話を仕組むための1つの方法として、ICT活用についてご講義いただきました。授業で対話を深めるためには、対話が必要となる明確な「問い」を示すことが大切です。その際、ICTを活用して、導入時の興味・関心の向上、多種・多様な情報の入手、幅広い検索、画像・動画の扱いやすさというような利点を生かすことにより、一層対話を深めることが可能になります。

具体的な活用方法として、次の5つをご提案いただきました。

- ① 写真を拡大して課題解決に必要な情報を見つけて話し合う。
- ② 読み取ったことを図や写真にイメージ化し根拠を話し合う。
- ③ 教材を電子マニュアル化し、相談しながら作品を創り上げる。
- ④ 動画を見てその中から見つけた情報を元に話し合う。
- ⑤ Web技術を使いその場だけでなく、遠隔でも議論する。

いずれにしてもICTを活用する場合、考えながら「説明する」活動を仕組むことが重要です。



明確な「問い」と
簡単なICT活用で
対話的な学びを！



「今の若者は冷めているのか？」

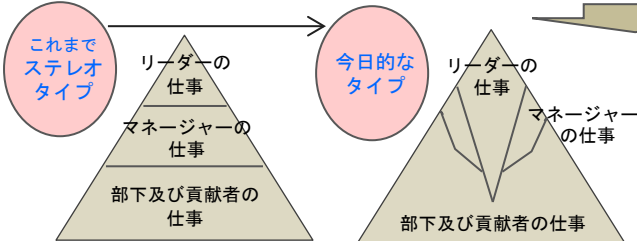
失敗を恐れ、自分の弱みを出しにくいものが多いのではないかと。熱くなりたくても、その対象を見いだせずどうしていいかわからないのではないかと。若者たちが熱狂するような、自らの経験から出た言葉で語る、そのような場を設定し、動機に働きかけることが必要である。

「社員が自律的に働くことが求められている」

多くの企業では、組織と個人の関係性が変化し、かつての組織主導型から、組織-個人対等型へと移行している。組織は個人の能力の発揮と成長の機会を提供し、個人は自らの絶えざる成長と組織へのコミットメントが求められる時代となっている。多様な社員に自律的に働いてもらわなければ経営が成り立たない時代である。

職員を信頼し、いかに引き出していくのか、そのためには職場を自律的に動く集団・人としていく必要がある。それが学校を活性化し、向上させていくものになると感じた。

【受講者振り返りより】



【マネージャーとリーダーの仕事】

有能なトップマネジメントは、自分の時間の80%をリーダーとしての仕事に充てる。しかし、組織の階層の一番下に位置する担当者でも20%の時間をリーダーとしての仕事に充てている。

「人材育成」とリーダーシップタイプ

「組織全体」から「個人と組織の関係」が重要となっている。組織は「自律した個人」の存在が前提であり、リーダーの役割はいかに個々のメンバーとの信頼を築き、個々のポテンシャルや自主性を引き出すよう支援するか、その環境を与えることが重要な時代となっている。そのため「オープン・リーダーシップ」による新しいルールが求められる時代となっている。

- 1 「顧客や社員が持つパワーを尊重する」
- 2 「絶えず情報を共有して信頼関係をつくる」
- 3 「好奇心を持ち、謙虚になる」
- 4 「オープンであることに責任を持たせる」
- 5 「失敗を許す」



不思議な縁と伝える使命 ～魂の伝承～

昨年度末のある日、10年前に鳥取市内の中学校長を定年退職された大先輩が私を訪ねて来られた。来訪の趣旨は「この本をあんたに引き継がんといいんと思って…」というものだった。もともと中学校の国語教師であったその先輩から手渡されたのは、『川口義克先生 教育語録』という、45年前に書かれた一冊の本だった。

川口義克先生については、紙面の関係上、その詳細を書くことはできないが、明治41年生まれの先生は、鳥取大学教育学部の教授であり、国語教育学の研究者・教育者として多くの優れた国語教師を育成し、本県の小中学校における国語教育の発展に多大な貢献をされた先生である。実践に即した個人誌「教育国語」を毎月刊行して、研究活動の日常化に努められ、志を同じくする現場の国語教師とともに先生が始められた「月例研究会」は、県東部の国語教師を中心に、学校の枠を超えて互いの実践を交流する場として広がっていった。

私自身の20年前を振り返った時、川口先生から始まって諸先輩方が脈々と続けてこられた「月例研究会」の、その流れの一端に触れさせていただいていた当時の自分がある。今にして思えば、それはたいへん貴重な学びの機会だった。

さて、その本を先輩から引き継いで約2か月後の本年5月中旬、一人の年配の男性が再び当教育センターを訪ねて来られた。その人は、『川口義克先生 教育語録』を執筆・発行された、これも国語の大家として有名で既に米寿を迎えられた中西敏先生、ご本人であった。中西先生のお話をお伺いすると「3年前に亡くなった谷川峰男先生の足跡を本にして残すため、先生の所長時代の資料を提供してほしい」ということだった。ちなみに、谷川峰男先生は、元中学校の国語教師であり、私の19代前の所長である。

このような一連の偶然の出会いを通して私は、世代を跨いだ不思議な縁のつながりというものを感じずにはいられなかった。そして、私たちの前を歩まれた諸先輩方の思いや、その魂をきっちりとした次の世代に引き継ぐ使命を再認識すると同時に、その責任の重さをしみじみと噛みしめたのである。

「教育は、教師が情熱を持って子どもの心に火をともし導き、民族の文化と魂を受け継ぎ、伝えていく大事業なのである」とは、『川口義克先生 教育語録』の巻頭言を執筆されている、かの森信三先生の言葉であるが、最後に『川口義克先生 教育語録』から一つ、言葉を紹介したい。

『「教育に生きる」ということは、子どもの胸の中に住みこむ教師となることである。』